

蜂どもの回向

市川貴弘

一年ごろ、蜂と我との、いと近しくなれることあり。幼きより我、おしなべて虫、鳥、獸など好く向きの強かりしを、こと蜂に付きては、その思ひ見立ての改まれることぞ、身に於いても心に於いても隔て取り除かれぬる由なるべき。縁深くなれるは、四海の人をして思ひ煩ひせしめたる彼の大量死ありけるミツバチならで、生きて其處にあれば人の思ひ煩ふスズメバチの類なりき。今年を含め、はや三年、キイロスズメバチの営巢、我が家になされたり。初めの年は、道沿ひなる生垣に巢作りけれど、こは町擧りて草刈りする日に、作業せる職員に見つけられけむ、我が方につゆ斷り無く、はしたなき様にて驅除されにき。我自らは日ごと巢の横歩けど何の害もなかりしかば、かかる業にはいと凄まじき思ひをこそせしか。重ねて悪しけくは、まさに驅除せられんとする場に出であひにしことなりき。なのめなる抗議はせしかども、町の仕事に、人を危ふきより守らんとする誠も感ぜられて、勞ふ言葉かけおきたり。

翌年の夏、家の裏手の草、鎌にて刈りたる連れ合ひの、蜂に刺されたりと言ひ來れることあり。さしたる腫れにもあらず。行きて見るに、息をこそ吞みつれ。床下に繋がる通風口より、キイロスズメバチ、あまた出で入ればなり。 「蜂起」てふ言葉のあるを、蜂は忽然として身ながら羽化するものならんや。それまでつゆ氣づかざりしことよ。連れ合ひは、巢の目前にてぞ作業したりける。勝手口の横なり。日ごろよく使ふ所なれば、巢の眞横なる戸はその後も度々開け閉めせり。勿論、横に蜂は群れゐて飛びまはる。畢竟、秋になりて巢の空になるまで、かくは過ぐしぬ。

思ひ返すに、幼きほど、鄙なる親戚のがり行けば、軒下、高き庇などに必ずスズメバチの巢ありき。然れども、刺されぬといふ話、つゆ聞かず。氣荒く、刺されば死なん人も稀ならぬおぞき生き物こそ、今日、スズメバチと言はば人の思ひ描く姿ならぬ。我も茶畑にてオホスズメバチに刺されたることあり。その痕、なほ脚に残る。クロスズメバチ、ミツバチに刺されしこともあるを、刺されたる所以はおほかた我が咎なりと言はざるべからず。蓋し、敢へて人家に巢作らん業は、人ならぬ蜂の身こそ寧ろ危ふけれと言ふべし。よも、人を刺さんとして人家に來り巢作りする由もあるまじ。

我がうつくしき思ひ持ち、向き合ふを得たるは、アシナガバチ、その初めなりき。元の職場にて山の下草刈りしたる折、アシナガバチの大人しきことを知りぬ。巢ある枝の横に手伸ばして刈れど、ただ我をまもるばかりにて、怒りもせず。巢に手はかけざりしかど、かく大人しき蜂の暮らし脅かしたる我が行ひに、罪を感ぜしことよ。

またある夏、殺蟲劑かけられたる巢を部屋に持ち歸りしに、生き残れる蛹の、後に羽化したる、一匹あり。朝には我が部屋より外に出で、タベに歸り來る。餌は蜂蜜を手づから食はせつ。庭にそのアシナガバチの飛ぶを見るにつけても、我ら知り合ひなりと、いとど嬉しく思はれぬ。似たる成り行きありて、冬まで我が部屋に暮らしつる雄蜂もありき。

一昨年のこと、職場の木に、ホホナガスズメバチ、巢作る。人の必ず通るところなれば、驅除するに如くはなしと人言ふ。先に述べたるキイロスズメバチに同じき年のことなりき。巢の見つかるまでは誰も刺されざりければ、今後も蜂は刺すまじと主張はしつれども、刺さるる人あらば如何と問はれ、そはものの理ならずやと答ふれば、人にはただ愚かなる話に聞こえけん。笑はれて終はりぬ。さは言へ、實害なきに、針あるばかりに無碍に殺されば蜂も堪るものかと思はれて、一念發起すらく、我が自ら枝ごと巢を移してみんとぞ思ひ定むる。刺さるるとも宜なり、自己責任となん言ひつべき。

對ミツバチなる裝備はスズメバチに役立たず、或は噛み破かれ、或は目に毒液かけらるるところ。そのミツバチ用てふ裝だに持たぬ我は、スキーウエアにジャンパーの俄か裝備以てぞ、夜に現場へ出向きぬる。さりながら、いかなることなりけん、鋸にて枝切る間も、裏山に持ちていく間も、一匹すら巢より出で来ざ来き。何となく、スズメバチに受け入れられたるかの如く感ぜられて、以來、我儘なる親しき覺えはじむ。因に、その蜂の巢、移し置かれたる裏山にて榮榮え、日ごと大きになりまさる。秋には空家になりぬれば、職場に持ちて歸りぬるを、驅除思ひける人には恥づかしかるべきほどの大きさ、なかなか同僚の氣に入りて、與ふれば、その人、己が机上になん飾りつる。

さて、キイロスズメバチの、我が家に營巢せること三度目の夏と今年はなりぬ。連れ合ひの「蜂に刺されたり」の一言にぞ、また氣付きにしよ。今度も大した腫れにはあらざりき。蜂のまことに怒りなば、群れなし飽くまで刺し來ることを、我は子供の頃、クロスズメバチに思ひ知らされたる例あり。連れ合ひの二年續けて巢の前にて刺されながら、かく言はば、不謹慎にもこそあらめ、我には蜂の挨拶かとすら思はれにし。

巢は物置なりき。家屋よりは少しく離る。寄りてみるに、顔の前にまづ一匹飛び來る。我が氣色何ふさまなり。背中にも留まれるらし。うち震ふ羽音、身の明るき黄色、我が骨肉にあたかも鋭く入り來るが如くなり。暫く檢分ののち、蜂は離れ行きたり。その後は何事もなく日々過ぎて、秋になり、巢のみ残して皆去りにき。巢は物置の壁裏に、丸ならで、セメント流し込みたるがごと、作られたり。

我が家は借家なれど、隣は空き家、裏は藪、他は道路に相對す。かかればこそ、煩はしき蜂騒動にならで濟みけん冥加もあるべけれ。さはあれ、その藪にも空き家にもあらずして、人の住む我が家にことさら巢作れるは、専ら先方の、有難き志によらざるることなかるべし。付き合ひ數年經て、蜂の無闇に人刺さぬこと、はや明らかなりと我は自負す。推定築四十年、蟻もワラヂムシもナメクジも室内に現れ、秋にはカメムシ數百匹、冬眠に訪ふ。故に困れりといふことなし。共存せらるるものならば何にても受け入れん思ひをぞ、やうやう持ち始めたる。

佛教に一切衆生と言ふは、人のみならず、生くる物は總て指す謂ひなりとかや。回向文にかくなん。「願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道」。同じき衆生たる我に、蜂こそ功德を齎もたらしつれ。命を賭して我が認識を變へ、我が持てる愛情を廣げしめたる蜂どもに、我は深く感謝せざる能はぬものなり。

(平成二十八年十一月三十日受附)